

コラム 4 持続可能な社会

足ることを知る—江戸時代の持続可能な社会

本コラムでは、日本の伝統的な生き方として示唆に富む江戸時代の循環生活を紹介する。同時代に入る頃には、森林資源の枯渇や災害の発生が深刻化するようになり、同時代、幕府や各藩は、「留山（とめやま）」を定めるなど、森林の伐採を禁じる保全対策などを取ったほか、造林を推進した¹⁸⁴。尾張藩では、「木一本首一つ」と呼ばれるほどの厳しい制度がしかれ¹⁸⁵、秋田藩では「国の宝は山なり（中略）山の衰えは則ち国の衰えなり」と林業資源保護・保全の重要性が唱えられたりした¹⁸⁶。

江戸時代の研究家である石川英輔によると¹⁸⁷、江戸時代の日本は、あらゆる面で植物と共存し、植物に依存し、全てを循環させる「植物国家」だった。金属と陶磁器と石製品以外のほとんど全てが植物由来で、それも、材木以外の大部分は、過去一年か二年間の太陽エネルギーによって育った植物だけが利用され、全てが循環する仕組みとなっていた。ほとんど全てのものがゴミにならずに、リサイクルされて使われ続けたことから、今でいうリサイクルリユースを専門で営む業者が数多く存在し、産業の一部となっていた。例えば、提灯の貼り替え、錠前直し、朱肉の詰め替えなどの職商人、金属製品、瀬戸物の焼き接ぎ、桶や樽の箍（たが）を締め直す箍屋、下駄の歯入れ、鏡研ぎ、臼の目立てなどの修理専門業者、紙屑買い、古着屋、傘の古骨買い、古樽買い、ロウソクのしずくを買い集める業者などの回収業者がおり、下肥や植物の最後の形である灰も残らず買い集められ、肥料として土に返されるなど再利用された。そのため、下水に流れる生活排水も少なかった。また、リサイクルだけではなく、モノをそのままの形で大事に何度も使うことも、あたりまえに行われていた。

このような循環生活は、経済規模の拡大には寄与しないが、全体としての環境は非常に安定していた。江戸時代は、国内総生産（GDP）で経済の豊かさが測られた時代ではない。江戸時代中期の儒学者である太宰春台が著した『経済録』には、「凡（およそ）天下国家を治（おさむ）るを経済と云。世を経（おさ）め民を済（すく）ふと云ふ義也（なり）」と記されている。

江戸時代の社会は、持続可能な循環型の社会だったと考えられる¹⁸⁸。金沢工業大学未来デザイン研究所のアズビー・ブラウンは、江戸時代、環境の劣化の兆しもほとんど見せることなく、膨れ上がった人口を養うことができたのは、技術の進歩、幕府や諸藩の政策も大きく影響しているが、とりわけ、日本社会に広く浸透し、あらゆる改善を導く原動力となった人々の精神的態度——自然のメカニズムと自然の本質的な限界に対する理解に根ざしたもので、謙虚さを尊び、浪費を嫌い、協力による解決を求めて、一人一人が必要な分だけを手に入れそれ以上を求めない、「足ることを知る」精神的態度——が大きかったと指摘している¹⁸⁹。

¹⁸⁴ 林野庁 Web サイト参照（<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/25hakusyo/pdf/6hon1-2.pdf>）。

¹⁸⁵ 林野庁 Web サイト参照（<https://www.rinya.maff.go.jp/chubu/kiso/morigatari/rekishi.html>）。

¹⁸⁶ 林野庁 Web サイト参照（https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/introduction/gaiyou_kyoku/nibetu/3_rekishi/index.html）。

¹⁸⁷ 石川英輔（1997）『大江戸リサイクル事情』、講談社文庫。

¹⁸⁸ 環境省 Web サイト参照（<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h20/html/hj08010202.html>）。

¹⁸⁹ アズビー・ブラウン（2011）『江戸に学ぶエコ生活術』（幾島幸子訳）、阪急コミュニケーションズ。

本コラムでは、2005 年秋に、英国南部デボン州にある小さな町トットネスで始まったトランジション・タウンの活動を紹介する。

トランジション・タウンの活動は、コミュニティ主導の草の根活動で¹⁹⁰、気候変動とエネルギー問題（ピーク・オイル）への対応策として、パーマカルチャー¹⁹¹の講師、ロブ・ホプキンスが中心になって開始した。トランジションとは「移行」を意味しており、エネルギーを多量に消費し、化石燃料に大きく依存する脆弱な社会から、エネルギーの消費量を減らし、地域の人々が協力しあう柔軟で復元力（レジリエンス）の高い社会、いわゆる持続可能な社会へのポジティブな移行を目指している。最初は、地域に存在する様々な問題に対する共通認識を高めることから始まり、市民自身がグループを立ち上げ、行政、企業、大学など様々な団体や組織と協働関係を築きながら、持続可能な社会に移行していくためのプロジェクトを計画し、実践していく¹⁹²。

トランジション・タウンの活動は、一人一人の市民が、当事者意識をもって、ポジティブな未来を描いて創意工夫をしながら、主体的に自分たちにできることを実際の行動に移していくことが、やがて大きな変化につながっていくことを示している。この活動は、世界各国の地域に広がりを見せており、日本を含む 50 か国以上の国でトランジション・コミュニティが立ち上がっている¹⁹³。

¹⁹⁰ Transition Town Totnes Web サイト参照 (<https://www.transitiontowntotnes.org/about-us-2>)。

¹⁹¹ パーマカルチャー：Permanent（永続的）、Agriculture（農業）、Culture（文化）の用語を掛け合わせた造語で、人間の持続可能な暮らしのためのデザイン・システムを意味する。

¹⁹² ロブ・ホプキンス（2013）『トランジション・ハンドブック』（城川桂子訳）、第三書館。

¹⁹³ Rapid Transition Alliance Web サイト参照 (<https://rapidtransition.org/stories/transition-towns-the-quiet-networked-revolution/>)（2019 年 10 月時点）。